



「く…っ！離せっ下衆野郎っ！」

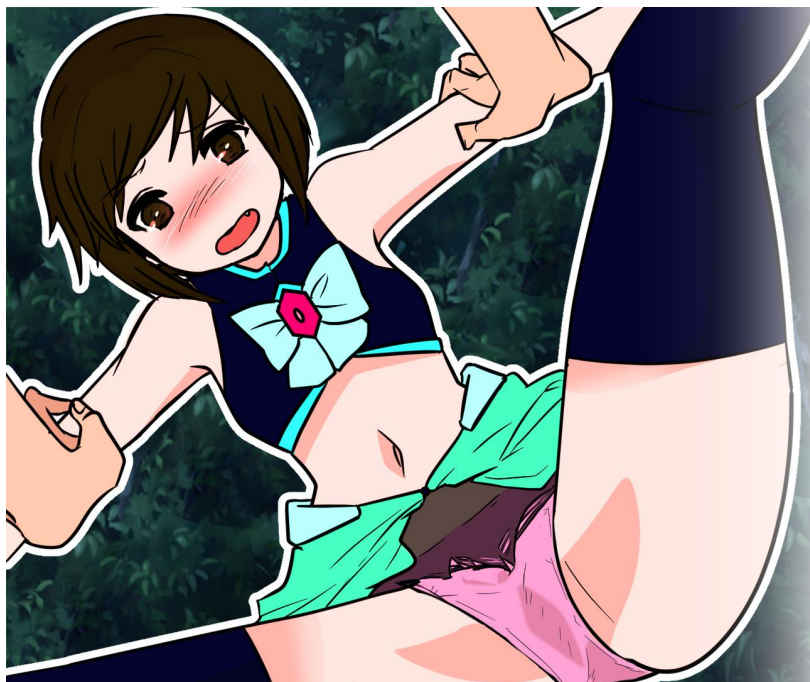
「おっと！暴れないの！
みづきちゃん雑魚魔法少女すぎて
負けちゃったんだから、現実認めて
大人しくま○こ出してっ♪おら！」

ビリビリイ！！

――深夜 人気のない雑木林の中で

少女に大人の男が覆いかぶさっている。

少女は歯ざしりをしながら激しく
抵抗するも、股の部分のタイツを
破られ、桃色のパンティーが
露わにされた。



「魔法少女の服ってエロいよね〜♪
これ、このままパンツずらして
生ハメちゃって良いのかな〜？」

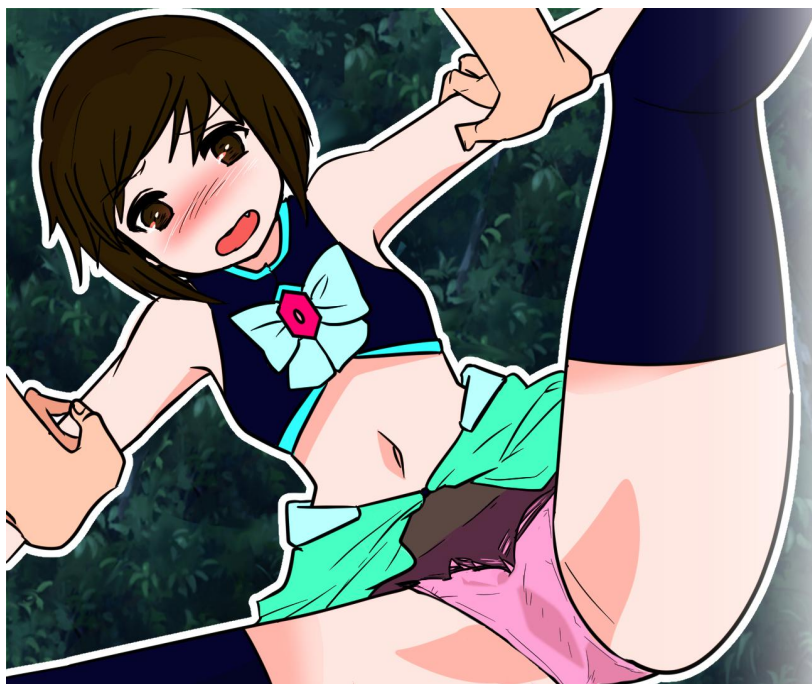
「馬鹿を言わないで！！誰が
お前なんかにっ！」

「だから〜、みづきちゃんは
そのバカに負けたんだって。

いい加減受け入れなよ！」

ガシっ…と腰を押さえつけられる。

みづきと呼ばれた少女は、
ビクリと体を震わせる。



「魔法少女やってるんだから、
いつかこうなることは想定できた
でしょ？
みづきちゃん以外の
魔法少女だって、み～んな
負けたらオマ○コにびゅ～びゅ～
種付けされて犯されるんだから」

それを聞いて、これから自分の身に
起きることを予期し、
ゾクッ……と恐怖の寒気を感じた
みづきは、瞳にうっすらと涙を
滲ませた。

「あれれえ！？泣いちゃった！？
やっぱ怖いんでちゅか～？」

「うっ……うるさい！黙れっ！！」

「はいはい、じゃあ始めようかね。
まあまずは……」



男はみづきの桃色パンツに手を
かけると、ぐいっと指でずらす。
「ひっ……」

外気に晒したみづきの秘所。

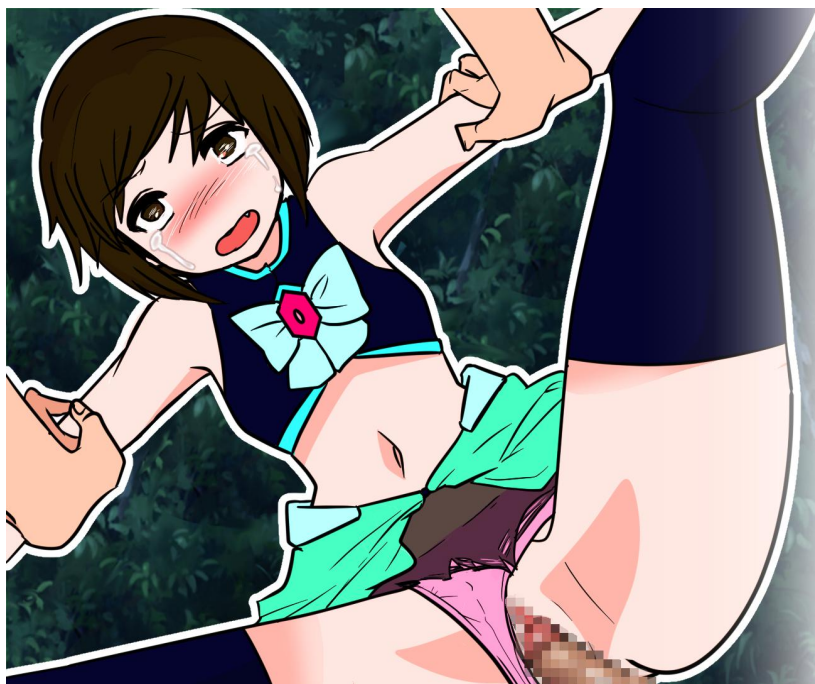
その中心には綺麗なピンク色を
した処女のオマ○コがあった。

（嫌っ！こっ、こんな奴の前で…
ボクの…見られてる…!!）

好奇の眼差しで、自らの大切な
場所を視姦され、みづきは
屈辱感でいっぱいになる。

「へえ、みづきちゃん
可愛いオマ○コじゃん♪」

「見るなあ…！」



顔を真っ赤にして叫ぶみづき。

そんな彼女の顔を見て、
男はニヤリと笑う。

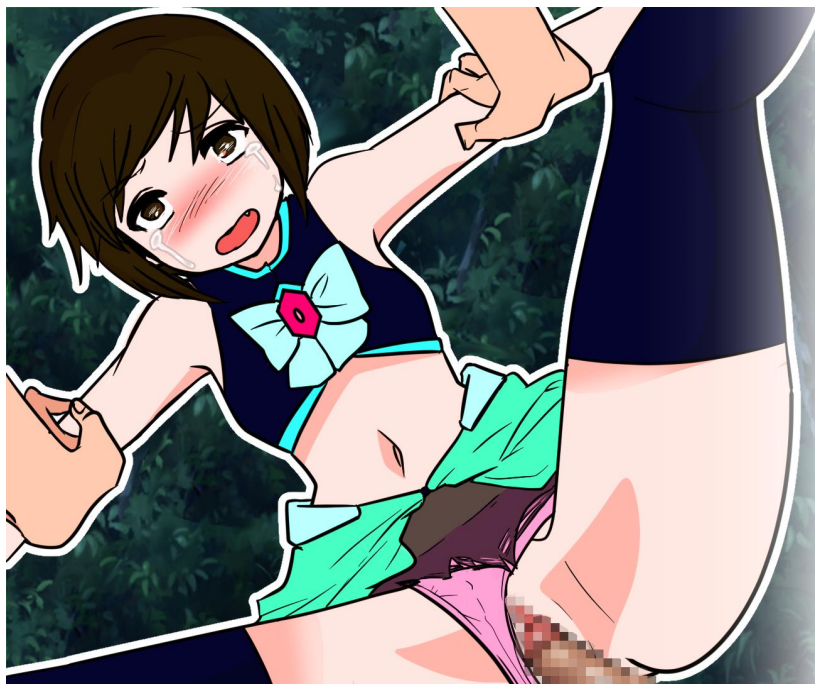
「ほら見て。俺もうフル勃起♪
今からみづきちゃんのオマ○コに
入れちゃうからね～？
俺のチンチンちゃんと気持ちよく
してねっ！」

「嘘っ…いやぁ!! やめて!!!」

くちゅ…くちゅ…。

亀頭を濡れた膣口に
擦りつけるようにされて、
みづきはブルッと身震いをする。

処女を奪われる恐怖に屈したのか、
頬に涙が伝っている。



「やめてお願いそれだけは…
あぁっー!?」

——ズブッ!!!

そして、男の太い肉棒がみづきの
膣内に挿入される。

「ひあああ——あっ!!!」

突然の衝撃に悲鳴をあげるみづき。
破瓜の血が流れ、
純潔だった証である赤い鮮血が
太ももを伝っていく。

「おおっ! キッツう♪ まったり
チ○ポに絡みつくう～♥
んっん、凄いいっ! おちんちん幸せ
だよ♥みづきちゃんっ!」



男はそのまま無遠慮にピストン運動を始めた。

ズブッ!ズブッ!という激しい音と共にみづきの声が響く。

「やあっ、あっ!あああっ!!」

「ふっ!ふっ!どうだい?俺のちんぽ気持ち良いかい?」

パンっパンっパンっ!

「嫌あっ!!!抜けっ!抜いてよおっ!!!」

泣きながら必死に抵抗するみづきだが、男の巨体に抑えつけられていて身動きが取れない。



「ほらっ!これが欲しかったんだろ?ええ?」

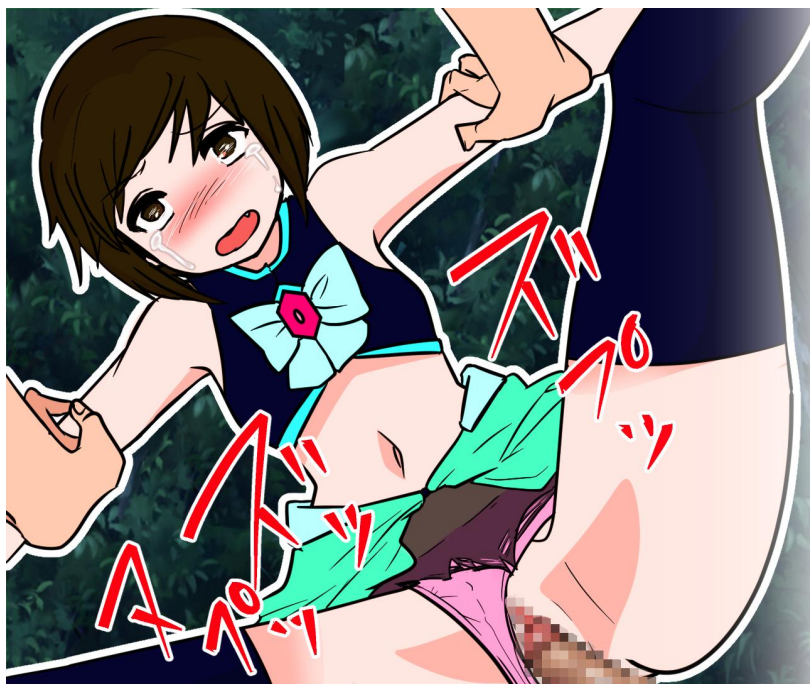
ドチュッ!!!

子宮口まで貫くような強烈な一撃に、みづきは意識を失いそうになるほどの快感を感じてしまう。

「あああっ!だめえ!奥突かないでえ!」

「何言ってるんだよ!本当はセックス大好きなくせにっ!魔法少女は皆最初はイヤイヤ言って何だかんだで堕ちたらアヘアヘなんだぜっ!」

「違うう…ボクはあんたみたいな変態…大っ嫌いだよ!抜いて!早く抜いてよっ!」



強情なみづきの言葉を聞き、男は一旦ピストンを止めると、

「へえ……ならもう抜くぜ？」

ズルウツ…

そう言いながらゆっくり肉棒を引き抜こうとする。

みづきはほっとした表情を浮かべるが、次の瞬間

ー ドチュン!!!!

再び一気に根元まで突き刺してきたのだ。

「〜〜っっっ!!!!」

あまりの激しい快楽に言葉にならない叫びをあげ悶絶するみづき。



「おいおい、嘘つくんじゃないよ！
本当は好きなんだろうがっ！
処女だったくせに……最初の
一発目から、こんな愛液
ビショビショでチンポ吸い込んで
くる膣、なかなか無いぜえ〜♥」

「ちがう……好きじゃない……！
好きじゃない……！」

ぱちゅん…ぱちゅん！

ねっとり、深く子宮口まで押し込むような抽送の刺激にみづきの快感は無理やりこじ開けられていく。

「素直になれよ！ほらほらっ！」
パンパンパンっ!!!
緩急をつけて何度も激しく腰を打ち付けられ、みづきの理性は次第に崩壊していく……。



「うぐっ!ひぎっ!ごめんなさいっ!
許してくださいっ!」

涙を流して謝りだすみづき。

「ん?何をだ?もっとはっきり
言わないと分からないぞ?」

「ボ、ボク……セックスが……
好きですっ!だから……
こんな乱暴なことしないで
くださいっ!」

もちろんみづきは本心では
なかった。

しかし、この状況では男を満足
させて一刻も早く
解放されたかったのだ。



「へへ……ようやく認めたか……
じゃあお望み通りたっぷり中に
出してやるよ……!」

ラストスパートをかけ、腰の動きを
速める男。

パンッパンッ!と激しくぶつかり
合う音が響く中、ついにその時が
訪れた。

「出すぞ……しっかり受け止めな!」

「ダメえッ!
中には出さないでえっ!!」

しかし、みづきの声は届かず、
そのまま大量の精液を
注がれてしまった。